

うつわ（器）

森 田 宗 一

私はこの間愛媛県松山市の在の砥部町に旧友を訪ねて二日滞在した。ここは有名な砥部焼の陶器の産地である。友人は悠々自適の生活の中にも、窯を持ち「一水」と号して味わい深い陶器を焼いている。「蜜柑の花しきりに匂ふ陶の里」この自然に恵まれた砥部の里についた時の私の実感であった。

砥部滞在中、友人の案内と説明で、陶焼きのすばらしさと陶器の美しさに魅せられた。砥部山から出る石を砕いて土のようになつたものを練りあげ、器の原型がつくられる。それは始めは美しさもない単なる土の器である。それに彩色が施され、葉がぬられ、何百度あるいは何千度という火の窯にながい時間入れておかれると、やがて美しい光沢を帯びた陶器ができてあがる。時により複雑な色や光沢を出すためには、二度三度と窯に入れられ火をくぐらなければならない。そうしてこそあのすばらしい陶器の美が生まれるのだという。

私は感動した。人間の知慧と愛情と努力により、火をくぐり窯を出たあとの器の美しさ。そのできあがっていく創作の過程の微妙さ。そのすべてが感動的である。陶焼きを見ながら、私は陶器ならぬ人間そのものの教育のことを思った。言葉の真の意味での人づくり・育児・教育とは、まさにこれと同じにすばらしい感動的な事柄にちがいない。

昔から器は人物の意に用いられる。「あの人は器が大きい」とか「器が立派だ」とかいうのが、それである。「器量」という言葉も、本来は顔かたちでなく、その人の内容、人物のうつわを言ったもので、含蓄の深い言葉だと思う。

人間は自然のまま生まれたままで人間になるのではなく、愛情と丹精こめた人間の営み（それを保育といい、教育という）によって、人間になるのである。そこに人と人との出会いということが大切になる。誰とどこで如何に出会うかによって、人間の器量は創られるのである。それは陶器と陶芸家との出会いに似ているといえよう。親（ことに母親）や保母や教師の人物と愛情と努力とが、子どもを創っていく。子どもはどんな器にも作られていくものである。

それと同時に、器自身窯の熱い火をくぐらなくてはならな

い。そのことなくしては、陶芸家の努力は美しく実らない。人間の器にとって窯の火は、忍耐とか、苦勞とか困難を伴う体験にたとえられよう。人間の器が美しく成長し、人物が光沢を持つようになるためには、どうしてもそのことが必要だと思う。

この頃は、人間を育て教育する過程で、なるべく困難とか忍耐とかをさせ、安易に気儘にやり過ぐす傾向がある。教育における過保護や無保護の誤りが、そこから起る。美しい器が創造される筈がないのである。

人間の器が大きく美しく創られ、器量人となるためには、幼少年の時の教育だけでない。一生を通じて、人生のさまざまな体験を通じて、いくたびか窯の火をくぐる必要がある。生涯教育などといわれることの本当の意味は、そこにあると思う。

また人の出会いということでは、親や教師との出会いだけでなく、つき合う友だちとか環境の内での出会いも大切なことだと思われる。このことについては、「水は万円の器に従い、人は交る友による」と言われる。ここでも器ということがひきあいに出される。人間はすばらしい素質と生命力を持っているが、また一面大變他人の影響をうけて変化し易い、弱い、可塑性に富んだ生きものでもある。四角になるのも丸くなるのも交

る友（器）次第だというわけである。それまたしかな事実なのである。人間の教育において、一生の成長や人生の問題を考えるうえにおいて、そういううつわ（器）のことも考えなくてはならないだろう。

陶器焼き見字中の私の拙い短歌を掲げて、この小文の結びとしたい。歌の題も器（うつわ）である。

火をくぐり窯をいでて美しき

茶器と花瓶をあかず見いりき

窯ひらく時はおろがむものと聞く

おのずと我も頭をたれる

陶の美に魅せられ生きて五十年

砥部の里には蜜柑咲きそむ

美しく老ひ陶芸の鬼として

若きら訓し今日も轡を踏む

髪ながき若きらしかと轡轡踏む

横顔さびて美しかりき

（弁護士・東京家政大学）